

第2巻 舞台のグジャラートへの移動

物語の主舞台は、カウティリヤとチャンドラグプタの故地であるガンジス河沿いのマガダ国近辺（現ビハール）から、インドとパキスタンの境界にあるグジャラートの地へと移動した。二人は、その活動領域を大きく広げ、インド亜大陸全域から、さらには海洋をも視野に入れたマウリヤ帝国建設へとついに乗り出したのだ。

グジャラートと言えば、グジャラート料理に言及しないわけにはいかない。長く暮らしたマドラス（現チェンナイ）の大通り（マウントロード）に、いわゆるストーリーとは無縁な踊りと歌が満載のインド映画を上演する大映画館があった。そして、その横にあったのが、グジャラート料理のレストランである。出される料理は格別で、家族や知人達としばしば。インドの多くの主立ったレストランと同様に、肉類を一切使わない菜食料理であるが、何が格別かと言えば、味が極めて繊細であり、とりわけ、ブドウなどの果実やナッツ類が料理にふんだんに使われていて、多少の甘みがあり、他のインド料理とは一線を画する洗練された味がするのである。

グジャラート料理がなぜそのような多様な食材を用いるのかと言えば、それは、その地が、極めて古い過去から、海に向かって開かれ、地中海世界やアラビア海周辺の地域と濃い交流を遂げてきた土地だからであろう。古くインダス文明の時代にさえ、そこには世界最古の海港の一つと言われるロータルという町があった。ビーズや宝石などが盛んにエジプトなどの西方諸地域と取引される、いわば海上交易の要衝であった。

チャンドラグプタとカウティリヤの二人の時代、アラビア海を商域としたザムランのような大商人が羽振りをきかせていた。古代から地中海世界が渴望し、その入手のためにローマ帝国からは金が消え失せるとプリニウスに嘆かせた香辛料をはじめとする特産物をインドは豊富に産していた。何せ秩序などとは無縁の戦国時代であったから、船に積まれた巨額の富を狙う海賊が跋扈し、奴隷商人も暗躍していた（マウリヤ帝国が奴隷を禁じたことは知られており、そのことを物語に自然に埋め込む印南氏の手腕には驚くしかない）。

制海権をめぐる争いとグジャラート

少し時代が下がった15世紀から16世紀には、このグジャラート沖で、その後の世界史を動かす決定的な海戦が展開された。それまで、アラビア海を主舞台にして活動していたのは、西アジア出自のアラブ商人であり、ダウ船を駆使してインド洋と地中海を結ぶ世界交易を独占していた。そこに殴り込みをかけたのが、15世紀末に、喜望峰を経由して、インドへの直接航路を拓いたバスコ・ダ・ガマの母国、ポルトガルであった。

ポルトガル勢力は、インドへの通商路を篡奪しようとして、アルブケルケを総督として大量の軍を送り、それまでムスリム商人が支配していたアラビア海の制圧を試みた。このポルトガル艦隊は、1509年、グジャラートの港ディオの沖合で、エジプトのマムルーク朝スルタンとインド勢力の連合軍と激突した。明らかに劣勢であったポルトガルは、しかし、アルブケルケの奇襲作戦によって最終的に勝利をおさめた。これを契機として、ポルトガルは、

の制海権を掌握することに成功したのである。このディウ沖海戦の歴史的意義の大きさが示唆するのは、グジャラート沿海地方の制圧が、地中海世界とインド洋世界の海上交易の支配に決定的だったことである。なぜなら、海上交易ルートは、丁字や肉桂などの特産物を産する東南アジアへと伸びており、アラビア海から、ベンガル湾、さらには南シナ海に広がるそのルートの重要な中継拠点であったグジャラートの港市には、大きな富がもたらされただけでなく、そこを通じて、長崎の出島のように、外の世界に関する重要な情報がもたらされたからである。インド洋での決定的な戦略的重要性を持つグジャラート地域に、チャンドラグプタとカウティリヤは触手を伸ばした。それは、この二人が、単に個々の戦闘の局面を、『ラージャで』で鮮明に描写されているような天才的なひらめきで切り拓いていただけではなく、より深い目的を有していたことを示している。

陸と海、二つのインド世界と帝国建設

海へと広がるグジャラート地域の制圧は、帝国建設に進む若い二人の野心家にとって、どのような危険を冒してでもなすべき目標であった。そして、そのためには、本書に登場するザムランのような大商人や交易品の略奪を狙う海賊達を指揮下に引き込むことが必須であった。具体的にどのような手段でそれを成し遂げていったかについては想像をめぐらすしかなく、印南氏のお手並みを拝見している。ちなみに、カウティリヤの書『実利論』には、海軍を管轄する部局の設置が記されている。二人にとって、海の世界を統べることは、とてつもなく重要であったのである。

極めて肥沃な農業生産地域であったガンジス下流域のマガダの土地から、交易によって大きな富を得ていたグジャラートに彼らが主舞台を移したことは、二人が、もう一つの大きな認識を有していたことを示す。それは、インドが、陸のインドと海のインドから成り立ち、その二つの世界を統合しなければ、帝国の建設はなしえないと言う認識である。この点を、今少しみてみよう。

紀元前 2500 年前後から 1800 年前後までの数百年にわたって、都市的な性格の強いインダス文明が栄えたが、この文明は、突如として消滅し、それを担った人々がその後どうなったかも不明な謎の文明となっている。そして、その後紀元前 1500 年頃から、現在のイラン周辺の中央アジア地域からインド世界に入ってきたのが、アーリア人である。

アーリア人は、初期には、現在のパンジャーブ地域に入り、前 1000 年頃から 400 年かけてガンジス河上流域に動いた。さらには、前 600 年頃からガンジス河中・下流域にまで進出し、先住民を制圧し、マガダ国に象徴される 16 大国と呼ばれる群雄割拠の時代を現出させたのである。そのような動きの頂上にあっただのは、ヴェーダ聖典と呼ばれる精緻な祭式を主管するバラモン達であり、『ラージャ』の主人公の一人であるカウティリヤは、そのバラモンの中でも傑出した才覚を有した人物であった。

アーリア人によるガンジス河中・下流域への進出の背景にあったのは、鉄器の使用による

農業生産活動の格段の強化であり、そうした農業生産性の高さは、近年に至るまでの、同地域の極めて高い人口扶養力＝人口密度の高さに示されている。

このような、高い農業生産力を誇るガンジス河流域が陸のインドを代表するとしたならば、インド洋沿岸に発展した諸都市は、海のインドの存在を知らしめるものであった。古代ローマのインド洋との交易の密度は、胡椒の対貨としてローマからインドに運び出された金のあまりの量に、『博物誌』で知られるプリニウスをおおいに嘆かせたことでも知られている。ヨーロッパとインド洋世界との交易は、紅海・ペルシア湾からインドをつないだアラブ商人が主体となっており、『エリトリア海航海記』で季節風が「発見」されてからは、ギリシア・ローマの商人達もそれに加わったようである。そして、それらの海洋商人によって、地中海からインド洋、南シナ海、そして東シナ海にまでつながる交易ルートが設営されたのであるが、そうした海洋取引の中間にあったインドには、マラバル地方を中心として、幾つもの港市が誕生し、インドからの物産が各地に運ばれた。海のインドが、活発な海外交易の結果として、おおいに発展したのである。グジャラートは、そうした海のインドの代表的な地域の一つであった。

ガンジス河中・下流域の最先端地域であったマガダから、『ラージャ』で語られるグジャラートへのチャンドラグプタとカウティリヤによる活動の拡大は、こうした陸のインドと海のインドの二つの世界を統合する大きな野望を表現したものであり、それを『ラージャ』のストーリーの中で展開する印南氏の慧眼に、感服せざるをえない。

グジャラートと今日のインド

グジャラートは、20世紀最大の偉人とされるガンディーを生み、近年では、21世紀のインドを牽引するかと思われる首相モディを生んだ地でもある。また、その背後には、19世紀のイギリス植民地支配期に、アフリカ東海岸に進出していったグジャラート商人がおり、その末裔のひとりが、現イギリス首相のリシ・ナシクである。アメリカの一流大学には、インド人が続々と入り、そこからの出身者は、今をときめく巨大アメリカIT企業のトップを占めている。21世紀のグローバル・エコノミーを牽引するかとされるインドの行方と、それへの日本人の構えを用意する意味でも、今から20数世紀前のインドの天才のひらめきをみておきたい。

孫のアショカ王は、著名な碑文をその地のギリナガルの岩に刻ませている。

グジャラートの海との活発な関わりとその地の重要性は、その後の歴史でも示される。ヴァスコ・ダ・ガマによる喜望峰経由のインド航路発見により、ポルトガルはインドへの関心を大きく高めるが、アラビア海はムスリム商人が力を及ぼしていた地域であり、ポルトガル

の権益拡大はなかなか進まない。その背後には、それまでムスリム商人を通じて地中海からインド洋に至る貿易によって大きな利益を上げていたヴェネチア商人がいたためであり、ポルトガルの進出を阻もうとするヴェネチア商人達は、エジプトのマムルーク朝スルタンに働きかけて圧力を加えた。これに対し、ポルトガルは、アルメイダをインド総督に任じて大軍と共に送り、1509年、グジャラートのディウ島の沖合で戦闘が交わされた。ポルトガルはこれに勝利して、アラビア海の制海権を掌握したのである。